

漢代の秘書と校書事業

保科 季子

はじめに

漢代の宮中藏書（秘書）^①は、蕭何が確保した秦の宮中の圖書・文書を土台とし、漢朝の行政文書群と、広く民間から献上された書籍で構成されていた。前漢の成帝は使者を派遣して天下に遺書を求めさせ、書籍の収集に努めた。

高祖起ちて沛公と爲るに及び、何常に爲に事を丞督す。沛公咸陽に至り、諸將皆な争いて金帛財物の府に走りて之を分かつも、何獨り先に入りて秦の丞相御史の律令圖書を収めて之を藏す。沛公漢王と爲り、何を以て丞相と爲す。項王諸侯と與に咸陽を屠燒して去る。漢王具さに天下の阨塞、戸口多少、彊弱の處、民の疾苦せる所を知る所以の者は、何の具さに秦の圖書を得たるを以てなり。（『史記』蕭相国世家）

漢興り、秦の敗を改め、大いに典籍を収め、廣く獻書の路を開く。孝武の世に迄ぶまで、書は缺け簡は脱し、禮は壞れ樂は崩れ、聖上喟然として稱して曰く、「朕甚だ焉を悶む」と。是に於いて藏書の策を建て、（如淳曰く、「劉歆七略に曰く『外は則ち太常、太史、博士の藏有り、内は則ち延閣、廣内、祕室の府有り』と。」）寫書の官を置き、下は諸子傳説に及ぶまで、皆な祕府に充つ。成帝の時に至り、書頗る散亡せるを以て、謁者陳農をして遺書を天下に求めしむ。（『漢書』藝文志）

前漢では、秘書は未央宮の石渠閣、天祿閣、蘭臺、延閣、広内といった蔵書閣に蔵され、また太常、太史、博士官等の官府にも蔵書があつた。後漢では秘書は蘭臺、白虎觀、東觀、鴻都、辟雍、宣明といった所に所蔵された。

初め、光武遷りて洛陽に還り、其の經牒祕書之を載すること二千餘兩、此れ自り以後、前に參倍す。董卓都を移すの際に及び、吏民擾亂し、辟雍、東觀、蘭臺、石室、宣明、鴻都諸ろの藏せらるる典策文章より、競いて共に割散し、其の縑帛の圖書、大は則ち連ねて帷蓋と爲し、小は乃ち制りて滕囊と爲す。王允の收めて西する所の者に及びては、裁かに七十餘乘のみ、道路艱遠なれば、復た其の半ばを弃つ。後長安の亂に、一時に焚蕩し、泯盡せざるは莫し。〔後漢書〕儒林伝〕

光武帝が洛陽に運び込んだ前漢の秘書は車にして二千両以上、これが後漢二百年の平安のうちに三倍に増加したといふ。

漢代の皇帝は「広く献書の路を開」いて蔵書を収集したが、諸侯王もまた、武帝の兄・河間献王劉徳のように、書物の収集に情熱を傾け、河間献王の収集した書籍は、その後さらに皇帝に献上された。

河間献王徳、孝景前二年を以て立ち、學を修め古えを好み、事を實たし是を求む。民従り善書を得れば、必ず爲めに好く寫して之を與え、其の眞を留め、金帛を加えて賜いて以て之を招く。是れ繇り四方の道術の人千里を遠しとせず、先祖の舊書或れば、奉じて以て献王に奏する者多し、故に書を得ること多く、漢朝と等し。是の時、淮南王安も亦た書を好むも、招致せる所は率むね浮辯多し。献王の得る所の書皆な古文先秦舊書、周官、尚書、禮、禮記、孟子、老子の屬、皆な經傳説記、七十子の徒の論する所なり。〔漢書〕景十三王伝・河間献王徳〕

漢初、高堂生十七篇を傳うること有り、又た古經有り、淹中に出でて、而して河間献王、古えを好みて學を愛し、餘燼を収集し、得て之を獻じ、合して五十六篇、並びに威儀の事なり。……〔中略〕……漢初、河間献王又た仲尼

弟子及び後學者の記す所一百三十一篇を得て之を獻す。〔隋書〕經籍志

河間獻王のほか淮南王劉安も書籍の収集に努め、その後、少なくとも一部は宮中に収蔵された。⁽²⁾ いわゆる孔壁古文は、武帝の兄弟である魯の恭王が宮殿を建設する際に発見した古文経であり、やはり後に孔安国を通じて宮中に献上された。先秦古書の発見・収集に諸侯王は少なからず関与し、収集された書籍は宮中へと流れて、漢皇室の秘書として集積されていったのである。⁽³⁾

魯恭王孔子の宅を壊ちて、以て宮を爲らんと欲するに及びては、而して古文を壞壁の中より得、逸禮三十九、書十六篇有り。天漢の後、孔安國之を獻するも、巫蠱倉卒の難に遇いて、未だ施行に及ばず。春秋左氏丘明の修む所に及びては、皆な古文舊書、多き者二十餘通、祕府に藏され、伏して未だ發かれず。〔漢書〕楚元王伝・劉歆伝「移責太常博士書」

つまり、漢代の秘書の由来は、①蕭何が確保した秦の図籍と漢初以来の行政文書、②民間より漢皇室に直接献上された書籍、③河間獻王ら諸侯王が収集して皇室に献上した書籍、の三つに大別できるであろう。要するに、秘書は漢の皇室と諸侯王がその権力と財力を傾けて収集した漢宗室全体の財産であり、宮中に集約的に保管されていたと言いうるのではないか。

本論文は、以上の仮説に基づいて、前漢成帝期の劉向・歆父子に始まる秘書の校書事業に対して、宗室による漢皇室の秘書の管理という、従来の研究とは⁽⁴⁾ 少しく異なる視点で考察を試みるものである。

1、前漢の藏書閣と校書事業

(一) 藏書閣について

前漢時代の秘書の所藏場所として、特に名高いのは石渠閣、天祿閣である。

三輔故事に曰く、「天祿、石渠並びに閣名、未央宮の北に在り、以て秘書を閣す。」(『後漢書』班固伝・東都賦注) 閣とはどういう建物かと考えたとき、揚雄が天祿閣上より飛び降りて死にかけているから、高樓建築であつたと推測される。ただ、それは閣の本義ではないようである。『説文解字』には、「閣、扉を止める所以の者なり。門に从い、各の声。」と、閣とは扉を止めるシキミであると述べ、一方、『広雅』釈宮では、「棚、禁、栽、棧、閣なり」と、棚状のものであるとする。先に引いた『三輔故事』に、「以て秘書を閣す」と、閣を動詞に用いており、手偏をつければ「擱(お)く」となることから、閣とは物を収納しておくところ、その建物、要するに倉庫である。

実際に、漢代の辺境出土木簡には、官府や戍卒である私人の錢物の保管場所としての閣が散見する。(漢簡については、原文のまま挙げる。□は断簡記号。)

縣官帛□袍一□□三斤 縣官棠履二兩

縣官帛裘襲一領四斤四兩 縣官絺二兩

戍卒濟陰郡定陶池上里史國

縣官帛布二兩一領 縣官□□二兩

縣官帛布袴一兩七斤 縣官革履二兩不閣

縣官襲一領不閣

單衣一領自取 布巾一兩□□ 布練一兩陽取 □一索□□⁷

單袴一兩自取 □□自取 桌抹一兩陽取□□

□陽取 練緯紬五尺

□二□自取 ●右十一物闇官

受闇卒市買衣物名籍一編敢言之

(『居延旧簡』214・93)

(『居延新簡』E. P. T. 65: 56)

□卒闇錢簿 □(削衣)

(『肩水金閼簡』73EJT4: 124)

これら辺境出土簡においても、「闇さず(不闇)」「官に闇す(闇官)」等、闇は動詞として使用されており、官の倉庫である闇に錢や衣類などの私物を預け入れることを「闇す」、「官に闇す」と称したことがわかる。そして、「闇」への錢物の出し入れに際しては、錢の金額や衣類、布に至るまで、厳密なリストが作成されていた。⁷⁾ こうした登記手続きや錢物のリスト作成を含めて、「闇」という動詞で表現されていたと考えられる。宮中の秘書もまた、「闇す」と称される以上、辺境の闇同様、リスト化されて厳密に管理・収蔵されていたはずである。⁸⁾

(2) 劉向父子の校書事業

河平三年(前二六)、成帝は光祿大夫劉向に命じて中秘書の校訂・整理作業に当たらせ、また謁者陳農に命じて天下の遺書を収集させた。⁹⁾

成帝の時に至り、書の頗る散亡せるを以て、謁者陳農をして遺書を天下に求めしむ。光祿大夫劉向に詔して經傳・諸子・詩賦を校せしめ、步兵校尉任宏は兵書を校し、太史令尹咸は數術を校し、侍醫李柱國は方技を校す。一書已る毎に、向輒ち其の篇目を條し、其指意を撮り、錄して之を奏す。會ま向卒し、哀帝復た向の子侍中奉車都尉歆をして父業を卒えしむ。〔漢書〕藝文志)

劉向が經傳・諸子・詩賦を、步兵校尉任宏が兵書を、太史令尹咸が數術書を、侍醫李柱國が方技書を担当し、分担して校讎作業を進めた。作業全体の統括はもちろん劉向(死後は劉歆)であり、劉向がその任に選ばれた理由には、その學識もさることながら、劉向の祖父・劉辟彊、父・劉德、そして劉向自身と、代々宗正を歴任したことが大きいのではないか。^⑩

宮中秘書の多くの部分が諸侯王の収集に由来する以上、秘書は宗室全体の財産であり、宗室を管理する宗正がその職務の一端として秘書に關与しても不思議ではない。實際、宗正であった劉向の父・劉德が淮南王劉安の獄を處理した關係で、劉向の家には淮南王の藏書があつたのである。

上復た神僊方術の事を興し、而して淮南に枕中鴻寶苑秘書有り。書に神僊・使鬼物・爲金の術、及び鄒衍の重道延命の方を言うも、世人見る莫く、而して更生の父德は武帝時に淮南の獄を治して其の書を得たり。更生幼くして讀誦し、以て奇と爲し、之を獻じ、黄金成る可しと言う。〔漢書〕楚元王伝・劉向伝)

劉向は淮南王の藏書であつた『枕中鴻寶苑秘書』を幼少から目にする機会があり、劉向の家には淮南王の藏書以外にも、宗室所藏の書籍があつた可能性もある。代々宗正を務める家柄に生まれ、自身も宗正を経験し、しかも当時最高の學識を誇つた劉向が、宗室財産である秘書の整理の任に当たるのは、極めて穩当といえよう。^⑪

劉向らの秘書校定作業は、宮中所藏の書籍だけを見て行うのではなく、官府所藏の書や官僚たち個人の藏書を校讎の

ために提供させ（劉向自身も藏書を提供している）、さらに民間からの献上本とも比較・対校している。⁽¹⁴⁾ それは膨大な作業であるが、前節に述べたとおり秘書が「閣す」、つまりリスト化して管理されていたとすれば、劉向父子の整理以前にも秘書のリストは存在したはずで、リストを見て予め参校者の分担を決めたり、校讎のために提供された書籍を振り分けたりできたと思われる。

劉向は校正を終えるとい書ごとに解題を作成した。これが『別録』である。

昔劉向書を校し、輒ち一録を爲り、其の帰指を論じ、其の訛謬を辨ず。竟るに随いて奏上し、皆な載せて本書に在り、時に又た別に衆録を集め、之を別録と謂う。即ち今の別録是なり。（阮孝緒「七録序」『弘明集』卷三）

現在残る『戦国策』『管子』『晏子』『孫卿（荀子）』『列子』『鄧析』『説苑』の敍録は、『別録』の佚文であろうとされる。その内容は、全書の篇目、テキスト・クリティークの経過、著者の伝記、偽書の弁別などが含まれる。⁽¹⁵⁾ 劉向の仕事は、もともと宮中に所蔵されていた書籍だけでなく、成帝の古書収集に応じて出現した書籍の真偽判定にも及び、張覇の『百兩篇尚書』や、甘忠可の『天官曆包元太平經』は、いずれも偽書と認定された。⁽¹⁷⁾

校書作業の進捗具合については、班斂によって常に成帝に報告されていた。

（班）斂傳學にして俊材有り、左將軍史丹賢良方正に挙げ、對策を以て議郎と爲り、諫大夫、右曹中郎將に遷り、劉向と秘書を校す。事を奏する毎に、斂は選を以て詔を受け羣書を進讀す。上其の能を器とし、賜うに秘書の副を以てす。時に書布からず、東平思王自り叔父を以て太史公、諸子書を求むるも、大將軍白して許さず。語は東平王傳に在り。（『漢書』敍伝）

班斂はその姉妹が成帝の班婕妤であるから、外戚の近臣である。班斂は成帝より「秘書の副」を下賜され、この副本が、後漢時代に班固ら班氏が修史事業・校書事業に深く関与する礎となる。

劉向の死後は子の劉歆が事業を引き継ぎ、王莽時代にも継続された。劉歆は輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、兵書略、術數略、方技略より成る『七略』を作るが、周知のように、これが中国最初の圖書分類である。後漢成立によって、光武帝は秘書を洛陽に運び入れたので、全てとは言えないが、前漢の秘書は後漢に受け継がれたのである。

2、後漢の秘書と校書・修史事業

(一) 蘭臺から東觀へ

光武帝時代には、図讖の校定が中心であったが、明帝の永平年間から章帝建初年間にかけて、班固、賈逵、楊終、傅毅らを校書郎に任じ、蘭臺を拠点に秘書の校定を行わせた。彼らは校書と同時に、漢史の編纂作業にも従事した。班固伝によれば、前睢陽令の陳宗、長陵令の尹敏、司隸從事の孟異とともに『世祖本紀』を制作したとあり、班固、賈逵、傅毅らは、その学識もさることながら、文苑の士として、その文章力を期待されたと考えられる。

注目すべきことだが、これらの修史事業には、宗室や外戚に連なり、かつ学識に優れた列侯クラスの重鎮が監修として関わっていた。

初め、臨邑侯復学を好み、文章を能くす。永平中、毎に講學の事有るごとに、輒ち復をして焉を典掌せしむ。班固、賈逵と共に漢史を述べ、傅毅等皆な之に宗事す。(『後漢書』宗室四王三侯列伝・北海靖王興)

明德皇后既に立ち、嚴乃ち閉門して自ら守り、猶お復た讖嫌を致すを慮り、遂に更めて北地に徙り、賓客を断絶す。永平十五年、皇后勅して居を洛陽に移せしむ。顯宗召見し、嚴の進對閑雅にして、意に甚だ之を異とし、詔有りて仁壽園に留め、校書郎杜撫、班固等と與に建武注記を雜定せしむ。常に宗室近親の臨邑侯劉復等と與に政事を論議

し、甚だ寵幸せらる。(『後漢書』馬援伝・兄子嚴)

班固・賈逵・傅毅・杜撫らは、宗室である臨邑侯劉復や外戚である馬援⁽²²⁾の指揮の下で、『建武注記』、『漢史』等の執筆を行ったのである。

蘭臺を中心にした校書・編纂事業は、やがて東觀へとその場所を移していく。孔僖は、章帝によって初め蘭臺令史に拝せられるが、元和二年(八五)に章帝が東方巡狩より帰還した後には、東觀にて校書を命じられているし、黄香は元和元年(八四)に、章帝の詔によって東觀に詣り、「未だ嘗て見ざる所の書を読む」よう命じられている。⁽²³⁾さらに、章和元年(八七)正月に、章帝は曹褒に対し東觀において『漢禮』の編纂を命じた。

章和元年正月、乃ち褒を召して嘉德門に詣らしめ、小黄門をして班固の上る所の叔孫通漢儀十二篇を持せしめて、褒に勅して曰く、「此の制散略、多く經に合わず、今宜しく禮に依りて條正し、施行すべからしめよ。南宮東觀において盡心集作せよ」と。褒既に命を受け、乃ち禮事を次序し、舊典に依準し、雜うるに五經讖記の文を以てし、天子より庶人に至るまでの冠婚吉凶終始の制度を撰次し、以て百五十篇と爲し、寫すに二尺四寸簡を以てす。其の年十二月奏上す。(『後漢書』曹褒伝)

また、班固が和帝永元四年(九二)に没すると、和帝はその妹・班昭に詔して、東觀藏書閣にて『漢書』の八表と天文志の執筆を命じ、これを完成させた。

兄固漢書を著し、其の八表及び天文志未だ竟えるに及ばずして卒す。和帝昭に詔して東觀藏書閣に就きて踵ぎて之を成さしむ。帝數しば召して宮に入り、皇后・諸貴人をして焉に師事せしめ、號して大家と曰う。異物を貢獻すること有る毎に、輒ち大家に詔して賦頌を作らしむ。鄧太后臨朝するに及びては、與に政事を聞く。出入の勤を以て、特に子成を關内侯に封じ、官は齊相に至る。時に漢書始めて出づるも、未だ能く通じざる者多し、同郡の馬融閣下

に伏し、昭従り受讀し、後又た融の兄續に詔して昭を繼ぎて之を成さしむ。〔後漢書〕列女伝・班昭

永元十三年（一〇二）正月には、和帝は東觀に行幸して、書林や篇籍を閲覽している。

十三年春正月丁丑、帝東觀に幸し、書林を覽、篇籍を閲し、博く術藝の士を選びて以て其の官に充つ。〔後漢書〕

和帝紀・永元十三年

こうして見ていくと、章帝元和初年ごろより、蘭臺に代わって東觀での校書が散見されるようになり、和帝の永元年間には、校書・史書編纂事業の中心地は完全に東觀に移動したと言つてよいであろう。⁽²⁴⁾

（2）東觀校書

東觀を拠点とした校書・史書編纂事業は、後漢中期以後、繼續して行われていくが、その中でも、⁽²⁵⁾①安帝永初四年（一一〇）から永寧年間にかけて、②順帝永和元年（一三六）から桓帝時代にかけて、さらに③靈帝熹平四年（一七五）から光和六年（一八三）の熹平石經建立に至るまで、の三つの時期には、特に皇帝が詔を下し、人士を招集して行われている。以下、それぞれの詳細について順に論じていこう。

①安帝永初から永寧期の校書・史書編纂

安帝永初四年に始まる校書事業の統括者は劉珍である。

謁者劉珍及び五經博士に詔して、東觀の五經、諸子、傳記、百家藝術を校定し、脱誤を整齊し、文字を是正せしむ。

〔後漢書〕安帝紀・永初四年

劉珍字秋孫、一名寶、南陽蔡陽の人なり。少くして學を好む。永初中、謁者僕射と爲る。鄧太后詔りして校書劉駒

駱、馬融及び五經博士と與に、東觀の五經、諸子傳記、百家藝術を校定し、脱誤を整齊し、文字を是正す。永寧元年、太后又た珍と駱駝に詔して建武以來名臣傳を作らしめ、侍中、越騎校尉に遷る。延光四年、宗正を拝す。(『後漢書』文苑伝・劉珍)

この校書事業には、劉珍のほか、劉駱駝、平望侯劉毅(劉駱駝の從兄)、馬融が参加し、鄧太后の詔をうけて『建武以來名臣伝』(もしくは『中興以來名臣列士伝』)の編纂も行われた。⁽²⁶⁾『後漢書』皇后紀には、

太后宮掖に入りて自り、曹大家從り經書を受け、天文、算數を兼ね。晝は王政を省、夜は則ち誦讀し、而して其の謬誤を患ひ、典章に乖るを懼れ、乃ち博く諸儒劉珍等及び博士、議郎、四府掾史五十餘人を選び、東觀に詣りて傳記を讎校せしむ。事畢らば奏御せしめ、葛布を賜ふこと各おの差有り。又た中官近臣に詔して東觀に經傳を受讀し、以て宮人に教授せしめ、左右習誦し、朝夕濟濟たり。(『後漢書』皇后紀・和熹鄧皇后)

とあり、この時の校書事業は鄧太后の主導で、劉珍以下五經博士、議郎、四府掾史五十人以上が五經その他の校訂作業に当たる、というかなり大がかりなものであった。皇太后臨朝下ということもあり、宦官の蔡倫が監督に当たっている。⁽²⁷⁾このほか文苑として名高い李尤、王逸、さらには『說文解字』の著者・許慎が参加したと考えられ、まさしく多士濟々という印象を受ける。⁽²⁸⁾東觀は「老子の藏室、道家の蓬萊山」と言われ、⁽²⁹⁾東觀で校書に携わることは、当時の学者・文人にとっては憧れの的となった。

②順帝期・桓帝期の校書・編纂事業

安帝永初から永寧年間にかけての大規模な校書事業の後、おそらくルーティーンとしての校書作業は東觀を拠点に行われていたと思われるが、順帝永和元年(一三六)に、侍中屯騎校尉で不其侯の伏無忌、議郎黄景に詔を下して、宮中

の五經・諸子百家・芸術の校定を命じ、桓帝元嘉中には伏無忌・黄景・崔寔らに命じて『漢記』を編纂させている。

(伏) 光卒し、子晨嗣ぐ。晨謙敬博愛にして、學を好むこと尤も篤く、女孫を以て順帝の貴人と爲し、奉朝請、位特進たり。卒し、子無忌嗣ぎ、亦た家學を伝え、博物多識にして、順帝の時、侍中屯騎校尉と爲る。永和元年、無忌と議郎黄景とに詔して中書五經、諸子百家、藝術を校定せしむ。元嘉中、桓帝復た無忌と黄景、崔寔等に詔して共に漢記を撰せしむ。又た自ら古今を採集し、事を刪著し、號して伏侯注と曰う。(『後漢書』伏湛伝)

順帝から桓帝期にかけての校書・編纂事業には、伏無忌、黄景、崔寔、延篤、辺韶、朱穆、鄧嗣らが参加している。安帝期の校書・編纂事業同様、先に校書を行い、後に人員を追加して『漢記』の編纂にあたっている。崔寔、延篤、辺韶は文苑として名高く、桓帝期の東觀は校書よりも著作に重点が置かれたように見える。

①②の校書・編纂事業はいずれも、宗室・外戚が統括者となり、中心的な役割を果たしている。安帝期の劉珍、劉駒駘は宗室であり、劉駒駘は列侯の子で身分も高い。順帝期の伏無忌は、列侯(不其侯)で伏氏は代々公主に尚して皇室と姻戚関係にあり、無忌の父伏晨の孫娘が順帝の貴人で、順帝にとってはかなり近い外戚となる。①の安帝期の校書には竇融の玄孫・竇章が校書郎として東觀に出入りし、②の桓帝期の事業には鄧氏一族の鄧嗣が参加しており、外戚は優先的に東觀校書に参画できたようである。

また宗室・外戚の中でも、親子・一族で校書・修史事業に参加する傾向があり、劉駒駘は永平中に校書・修史事業に参画した臨邑侯劉復の子で、従兄の平望侯劉毅も東觀で著作に携わっている。馬融も父・馬嚴は永平中に仁寿閣で著作に携わり、兄・馬続は馬融とともに班昭より『漢書』の難解な部分の読みを指南され、父子兄弟揃って校書・修史事業に関与している。劉復・劉駒駘父子、馬嚴・馬融父子と、宗室・外戚の特定の家族が校書・修史事業へ関与するのは、劉向父子や班氏一族より続く一つの特徴と捉えられるだろう。

校書・修史事業に宗室・外戚が主導的な役割を果たすことについて、胡広による王隆『小学漢官篇』の注の中に、以下の様な記述が見える。

前に安帝の時、越騎校尉劉千秋（筆者注：劉珍）東觀に校書し、事を好む者樊長孫書を與えて曰く、「漢家禮儀、叔孫通等の草創する所、皆な律令に隨いて理官に在り、几閣に藏せられ、記錄する者無く、久しく二代の業をして、闇にして彰かならずらしむ。誠に宜しく撰次し、依りて周禮に擬い、位を定め職を分かち、各おの條序有らしめ、人をして愚智無く、朝に入りて惑わざらしむべし。君公族の元老なるを以て、正に其に任に丁たるは、焉んぞ以て已むべけんや！」と。劉君其の言を甚だ然りとし、邑子の通人郎中張平子（筆者注：張衡）と參議せんとして未だ定めず、而して劉君遷りて宗正、衛尉と爲り、平子は尚書郎、太史令と爲り、各おの其の職に務め、未だ恤うるに暇あらざるなり。順帝の時に至り、平子侍中典校書と爲り、方めて周官解說を爲り、乃ち漸次を以て漢事を述べんと欲するも、會ま復た河間相に遷り、遂に能く立つ莫きなり。述作の功、獨り易からざるなり。……（『統漢書』百官志一劉昭注補）

樊長孫（不詳）は劉珍に宛てた手紙の中で、「公族の元老」である劉珍が校書・修史に携わるのは当然の職務であると述べている。前章において、劉向が祖父の代から宗正を歴任したことは述べたが、劉珍もまた宗正に就任していることは、注目してよい。安帝期の劉珍は宗正に相應しい「公族の元老」であり、順帝期の伏無忌は列侯でありながら『伏侯注』を著するほどの博物多識であった。明帝期の臨邑侯劉復、馬嚴もそうだが、秘書の校書事業・修史事業の統括の任には、宗室もしくは外戚中の、学識優れた重鎮が選ばれたのである。

このように見てくると、後漢時代の校書・修史事業もまた、前漢末の劉向父子以来の、宗室・外戚の学識高い重鎮が統括し、家族ぐるみで事業に關与する傾向があることが、明らかにになる。後漢時代に至つてもなお、秘書を宗室全体の

財産とみなす意識が引き続き継承されていたと考えられる。

(3) 熹平四年校書と熹平石經の成立

前節において、後漢時代における主な校書・修史事業について追ってきたが、秘書の整理・校訂作業は平時にも肅々と継続されていた。蘭臺令史、校書郎、東觀郎等、校書作業を担当したと考えられる官職が存在し、桓帝延熹二年（一五九）には、初めて秘書監が置かれ、校書作業はよりルーティン化されたと考えられる。

後漢における最後の大規模な校書事業は靈帝熹平四年（一七五）に開始される。その中心人物である蔡邕は、熹平四年以前より郎中として東觀で校書にあたっており、書籍の文字に誤りが多く、それが無用な詮索と誤解を生むことに気づき、堂谿典、楊賜らとともに六經の文字を正定することを求めた。

建寧三年、司徒橋玄の府に辟され、玄甚だ之を敬待す。出でて河平長に補さる。召されて郎中を拝し、東觀に校書す。議郎に遷る。邕經籍の聖を去ること久遠にして、文字多く謬り、俗儒穿鑿して、後學を疑誤すること以て、熹平四年、乃ち五官中郎將堂谿典、光祿大夫楊賜、諫議大夫馬日磾、議郎張馴、韓說、太史令單颺等と與に、奏して六經文字を正定せんことを求む。靈帝之を許し、邕乃ち自ら丹を碑に書し、工をして鐫刻せしめて太學門外に立つ。是に於いて後儒晚學、咸な焉に正しきを取る。碑の始めて立つるに及び、其の觀視し及び摹寫せんとする者、車乘日び千餘兩、街陌を填塞す。〔後漢書〕蔡邕伝

熹平四年の校書事業は、前節まで取り上げてきた桓帝期までの校書事業とは、異なる点がいくつかある。まず、蔡邕伝によると、上奏して校書事業を請願したのは議郎蔡邕、五官中郎將堂谿典、光祿大夫楊賜、諫議大夫馬日磾、議郎張馴、韓說、太史令單颺等で、宗室は見当たらず、外戚は馬融の族子である馬日磾のみである。この面々の中で一番の重

鎮は、おそらくは靈帝の師である楊賜で、子の楊彪も盧植らとともに東觀で校書したことが史料に見える。³¹⁾ただ、楊賜伝には校書のことは記載されておらず、楊賜が校書作業を統括したようにには見えない。実際の作業は蔡邕を中心に行われたのであろう。統括者が宗室でも外戚でもないのは、これまでに例がない。

さらに、蔡邕伝では蔡邕が主導しているように書いてあるが、宦者列伝によれば、校書の発案者は宦官の李巡となつてゐる。

時に宦者濟陰の丁肅、下邳の徐衍、南陽の郭耽、汝陽の李巡、北海の趙祐等五人、稱して清忠と爲し、皆な里巷に在りては、威權を爭わず。巡以爲く諸博士甲乙科を試すに、弟の高下を争い、更も相い告言し、賂を行いて蘭臺の漆書經字を定め、以て其の私文に合する者有るに至る。乃ち帝に白して、諸儒と共に五經の文を石に刻し、是に於いて蔡邕等に詔して其の文字を正さしむ。自後五經一定し、爭者用て息む。趙祐博學多覽、著作校書し、諸儒之を稱す。(『後漢書』宦者列伝・呂強)

太学の試験の際、蘭臺に保管されている漆書の五經の文字を、賄賂を払って私藏の經書に合わせて変える不屈き者が出るに至り、正しい五經を石に刻むように提案した、とある。宦官の趙祐も著作校書に携わっており、靈帝熹平年間在校書事業は、宦官の関与が大きいのである。

校訂した五經の文を石に刻して、太学門外に建立するのは、これまでの校書事業との最大の違いである。³²⁾これまでも、秘書のテキスト・クリティークの成果は『別録』『七略』あるいはそれをもにした『漢書』の藝文志のような形で、ある程度は外部に公表されていたのであるが、正定された五經の文字を石碑に刻もうなどというのは、まったく斬新な試みというほかない。光和六年(一八三)に熹平石經が完成し、洛陽南郊の太学門外に建てられると、碑文を見るだけでなく、写しを取ろうとする人々の車が、日々押し寄せたという。秘書の校定の成果は公開され、天下の士大夫に

よって共有されたのである。

熹平四年校書の、従来の校書事業と相違する点を整理すると、

- ① これまでは宗室・外戚の重鎮が統括したが、今回は宗室・外戚の関与が希薄である。
 - ② 校書の発案者は宦官であり、校書事業にも宦官が深く関与した。
 - ③ 校正作業の成果を石經に刻んで、洛陽南郊外の太学門外で公開し、天下の士大夫と成果を共有する。
- の三点にまとめられるであろう。

何故、熹平四年の校書においては、従来の校書事業と異なり、宗室・外戚の関与が見られないのであろうか。

周知のように、熹平四年は建寧元年（一六八）に始まる第二次黨錮のただなかである。第二次黨錮の引き金が外戚・竇武の宦官排斥計画であつたことを鑑みれば、靈帝が外戚を警戒するのは当然である。現に熹平五年（一七六）には、曹鸞による黨禁の解除を求める上書に靈帝は激怒し、禁錮の範圍を無辜の門生故吏・一族郎党にまで拡大した。³³ 靈帝の黨人に対する警戒は全く弛んでおらず、校書に参加する蔡邕、楊賜らの士人も、靈帝にとっては警戒の対象であつた。安帝永初年間の校書でも宦官の蔡倫が事業を監督しているが、これは鄧太後の臨朝称制下であるから、同列には論じられない。熹平四年の校書の場合は、意識的に宗室・外戚を排除し、宦官を校書に関与させたとも考えられる。言い換えれば、宦官を通じて校書事業を皇帝の直接統括下に置いたのである。

宮中東觀での經書の校訂作業に基づいて六經の文字を確定し、それを石經に刻んで太学門外に建て、その正定された石經が太学の甲乙科の試験の基盤となる。これは、宮中東觀での校書事業が太学の学問をも規定するということを意味する。加えてその校書事業は宦官の発案にかかるとすれば、太学門外の熹平石經は、太学に対する宮中（そして宦官）の優越をこれ見よがしに示威するものにも見える。第一次黨錮以来引き続き、太学（および士人）と皇帝（および宦

官)の間に深刻な対立が存在するこの時期において、熹平石經の樹立は、靈帝とその周囲による、太学に対する学問的思想的支配の志向を象徴するとも言えよう。

靈帝による太学相對化の志向は、光和元年(一七八)に初めて鴻都門学を置いたことにも表れている。⁽³⁴⁾熹平石經の樹立が光和六年(一八三)であるから、校書事業と石經制作は、鴻都門学の設立とほぼ平行していたことになる。

始めて鴻都門學生を置く。(注：鴻都、門名也、内に學を置く。時に其の中の諸生、皆な州、郡、三公に勅して擧げて能く尺牘・辭賦及び工みに鳥篆を書する者を召さしめて相い課試し、千人に至る。)(『後漢書』靈帝紀・光和元年二月)

光和元年、遂に鴻都門學を置き、孔子及び七十二弟子像を描く。其の諸生皆な州郡三公に勅して擧用辟召せしめ、或いは出でては刺史・太守と爲り、入りては尚書・侍中と爲り、乃ち封侯賜爵せらるる者有り、士君子皆な與に列せらるるを恥ず。(『後漢書』蔡邕伝下)

鴻都門学には詩賦や絵画に秀でる人材が招集され、一種の芸術学校と捉えられが⁽³⁵⁾ちだが、靈帝は鴻都門学を以て、むしろ太学に成り代わらせようと考えていたとみられる。陽球が、「今太學、東觀以て聖化を宣明するに足る。願わくは鴻都の選を罷め、以て天下の謗を消さんことを」(『後漢書』酷吏伝・陽球)と、東觀や太学と對比させて鴻都門学を批判したことが、その証明となるであらう。

熹平石經が、靈帝による太学に対する支配志向の象徴だとすれば、石經の基礎作業である熹平の校書事業も、当然靈帝の強力な監督下に置かれたはずである。従来の校書事業と異なり、宗室や外戚を排除し、秘書の管理を皇帝が独占したのである。宗室全体の共有物から皇帝の専有物へと、秘書に対する認識が変化し、秘書が宗室のしがらみから解放されたことにより、はじめて石經に刻んで天下に公開することが可能となったのである。

おわりに——帝室財産から共有文化財へ

漢代の宮中の秘書は、皇帝と諸侯王がその権力と財力を傾けて収集した書物に由来し、帝室財産として厳密に管理され、その閲覧は厳しく制限され、秘書を見ることは皇帝の特別な許可を必要とする特権であった。前漢の劉向父子以来、秘書の整理・校定作業は宗室や外戚の識者が皇帝の命を受けて行ってきたが、それは秘書が宗室全体の財産とも捉えられていたからである。「老子の蔵室、道家の蓬萊山」——後漢時代、東観で秘書の校書に参画することは、士人にとって大変な名誉であり、秘書を閲覧できる東観人士は、当時の士大夫の憧れの的であった。

皇帝に対し、石室の秘書を繙いて天意を求めるよう要求されることもあった。⁽³⁶⁾ 一般には見ることでできない宮中の秘書に対し、人々は何やら神秘性すら感じ取っていたのであろうか。⁽³⁷⁾

前漢末以来、秘書の校定作業は連綿と続けられるが、それは結局、宮中の奥深くの出来事にすぎなかった。東観における校書の結実として熹平石経を刻み、樹立したのは、永い校書事業の中でも画期的なことである。それは後漢末に至り、秘書を宗室全体の財産ではなく皇帝の専有物とみなす、秘書に対する意識の変革を待って、ようやく可能になった。太学門外の誰でも目にすることができるよう場所に移し、正しい六経の文字を皇帝の權威をもって天下に公開したのである。前漢成帝河平三年（前二八）から後漢靈帝光和六年（一八三）までおよそ二百年、嘗々と積み上げられた校定作業の成果である熹平石経は、後漢學術の一つの到達点でもある。熹平石経が立てられた時、帝室財産として閉ざされていた秘書は、広く士大夫に共有される文化財へと昇華したのである。

註

(1) 識緯の書・術数書などの神秘的な書籍を秘書と称することもあるが、本論で言う「秘書」は、宮中に禁蔵された皇帝の蔵書を指す。「中秘書」と称し、特に宮中での所蔵を強調し、宮「外」の官府所蔵のものと区別することもある。徐輿無「漢代的秘書」(『文史』二〇一四年第一期)。漢代の宮中の秘書の確立・変遷については、劉紅・李筆浪「論漢代中枢蔵書之確立・変遷及其影響」(『唐都学刊』第二七卷第四期、二〇一〇)。

(2) 『漢書』藝文志に「淮南道訓」他、淮南由来の書が著録されている。

(3) 成祖明「河間古文・孔壁古文和中秘古文——漢代古文經籍流伝考」(『古籍整理研究学刊』二〇〇七年第四期)。

(4) 従来の研究は、①劉向父子の秘書整理事業を中国目録学成立の視点でとらえるもの。余嘉錫「目録学發微」(『古書通例』(どちらも『余嘉錫說文獻学』上海古籍出版社、二〇〇一所収)、姚名達「中国目録学史」(上海古籍出版社、二〇〇二)等。②宮中所蔵の五經經文の校定事業を今古文対立の問題と絡めて、皇帝による經義・經文の統一という視点でとらえるもの。井ノ口哲也「後漢經学研究序説」(勉誠出版、二〇一五)第三章。③東觀校書と並行して行われた『東觀漢記』の編纂に関り、史学史や歴史觀の変遷の視点でとらえるもの。吳樹平「秦漢文獻研究」(齊魯書社、一九八八)。の、ほぼ三つの視点に大別できる。

(5) 『漢書』揚雄伝上「時雄校書天祿閣上、治獄使者來、欲收雄、雄恐不能自免、乃從閣上自投下、幾死。」

(6) 漢代辺境の関については、王国維「邸閣考」(『觀堂別集』一)、裘錫圭「漢簡零拾」二(『文史』第二二輯、一九八〇)、謝桂華「居延漢簡所見邸与閣」(『出土文獻研究』第三輯、一九九八)。なお、『居延旧簡』は謝桂華・李均明・朱国昭「居延漢簡釈文合校」(文物出版社、一九八七)、『居延新簡』は甘肅省文物考古研究所他「居延新簡 甲渠候官与第四燧」(文物出版社、一九九〇)、『肩水金閼漢簡』は甘肅省簡牘保護研究中心等「肩水金閼漢簡(壹)」(中西書局、二〇一〇)を底本とする。

(7) 黄潔波「『肩水金閼漢簡(壹)』所見卒閣錢簿」(『簡帛網』http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=1661 二〇一〇)。

(8) 『漢書』百官公卿表下「蒲侯蘇昌為太常、十一年坐籍霍山書泄祕書免。(師古曰、以祕書借霍山。)」とあり、祕書を勝手に貸し出すことは禁止されていた。また、揚雄「答劉歆書」(『方言』)には、「有詔可不奪奉、令尚書賜筆墨錢六萬、得觀書於石室。」とあり、皇帝の許可を得て初めて祕書を見ることができた。

(9) 劉向父子の校書に関しては、錢穆「劉向歆父子年譜」(『同漢經學今古文平議』東大圖書公司、一九八九所収)、余嘉錫前掲書、姚名達前掲書、池田秀三「劉向の學問と思想」(『東方學報』五〇、一九七八)、熊鉄基「劉向校書詳析」(『史學月刊』二〇〇六年第七期)、鄭駿捷「劉向校書考論」(人民出版社、二〇一二)など。

(10) 『漢書』楚元王伝、および『漢書』百官公卿表下・孝元初元元年(前四八)「散騎諫大夫劉更生爲宗正、二年免」。

(11) 榑身智志「前漢の宗正——帝室・諸侯王家關係再考——」(『史學雜誌』一二一—一二三、二〇一二)は、宗正の職掌は、宗室名籍を管理し、全国に散在する宗室の情報を収集・把握することであったとする。

(12) 劉向の父・劉徳は、昭帝の初めに宗正丞として劉澤(齊孝王の孫)の詔獄を治し、後、宗正として上官氏・蓋長公主の事件の処理にあたり、さらに宣帝擁立にも関与し、宗室・外戚の関わる案件の処理を数多く手掛けている。

(13) 榑身氏前掲論文によれば、宗正就任者には楚王家の出身者が多い。

(14) 『管子』叙録に「所校讎中管子書三百八十九篇、大中大夫卜主書二十七篇、臣富參書四十一篇、射声校尉立書十二篇、太史書九十六篇、凡中外書五百六十四篇、以校。」とあるように、宮中所蔵の中『管子』を校讎するために、太史所蔵の『管子』や、個人私蔵の『管子』を集めている。劉向も所有の『晏子』や『列子』を提供し、参校者(校讎に参加した者)も自身の蔵書を提供している。なお、その書の校書作業を手掛けた者の蔵書には名前に「臣」字を冠し、書を提供しただけで校書しなかった者の蔵書には「臣」字を冠しない体例があるという(鄭駿捷前掲書一五九頁)。「説苑」叙録に「所校中書説苑祿事。及臣向書、民間書、誣校讎。」とあり、「民間書」とは民間より献上された、もしくは陳農が収集した書籍であらう。

(15) 參校者に關しては、鄭駿捷前掲書一四八―一五五頁。

(16) 清水茂『中国目錄学』（筑摩書房、一九九二）一四頁。姚名達前掲書三三―三七頁。

(17) 『漢書』儒林伝

世所傳百兩篇者、出東萊張霸、分析合二十九篇以為數十、又采左氏傳、書敍為作首尾、凡百二篇。篇或數簡、文意淺陋。成帝時求其古文者、霸以能為百兩徹、以中書校之、非是。

『漢書』李尋伝

初、成帝時、齊人甘忠可詐造天官曆、包元太平經十二卷、以言「漢家逢天地之大終、當更受命於天、天帝使真人赤精子、下教我此道。」忠可以教重平夏賀良、容丘丁廣世、東郡郭昌等、中壘校尉劉向奏忠可假鬼神罔上惑衆、下獄治服、未斷病死。賀良等坐挾學忠可書以不敬論、後賀良等復私以相教。哀帝初立、司隸校尉解光亦以明經通災異得幸、白賀良等所挾忠可書。事下奉車都尉劉歆、歆以為不合五經、不可施行。而李尋亦好之。光曰、「前歆父向奏忠可下獄、歆安肯通此道。」

(18) 『尚書正義』武成の疏に、「鄭玄云、武成逸書、建武之際亡。」とあり、おそらくは王莽末から建武の混乱で、古文尚書の逸十六篇の「武成」篇は亡佚したとされる。

(19) 『後漢書』儒林伝・薛漢

薛漢字公子、淮陽人也。世習韓詩、父子以章句著名。漢少傳父業、尤善說災異讖緯、教授常數百人。建武初、爲博士、受詔校定圖讖。

『後漢書』儒林伝・尹敏

尹敏字幼季、南陽堵陽人也。……（中略）……帝以敏博通經記、令校圖讖、使鐫去崔發所爲王莽著錄次比。敏對曰、「讖書非聖人所作、其中多近鄙別字、頗類世俗之辭、恐疑誤後生。」帝不納。敏因其闕文增之曰、「君無口、爲漢輔。」帝見而怪之、

召敏問其故。敏對曰、「臣見前人增損圖書、敢不自量、竊幸萬一。」帝深非之、雖竟不罪、而亦以此沈滯。

(20)

後漢初期の蘭臺に關しては、小林春樹「後漢時代の蘭臺令史について——『漢書』研究序説」(『東方學』六八、一九八四)。

(21)

『後漢書』班固伝

父彪卒、歸鄉里。固以彪所續前史未詳、乃潛精研思、欲就其業。既而有人上書顯宗、告固私改作國史者、有詔下郡、收固繫京兆獄、盡取其家書。先是扶風人蘇朗偽言圖讖事、下獄死。固弟超恐、固為郡所覈考、不能自明、乃馳詣闕上書、得召見、具言固所著述意、而郡亦上其書。顯宗甚奇之、召詣校書部、云「兄固、被召詣校書郎」。除蘭臺令史、與前睢陽令陳宗、長陵令尹敏、司隸從事孟異共成世祖本紀。遷為郎、典校祕書。固又撰功臣、平林、新市、公孫述事、作列傳、載記二十八篇、奏之。帝乃復使終成前所著書。

『後漢書』賈逵伝

時有神雀集宮殿官府、冠羽有五采色、帝異之、以問臨邑侯劉復、復不能對、薦逵博物多識、帝乃召見逵、問之。對曰、「昔武王終父之業、鸞駕在岐、宣帝威懷戎狄、神雀仍集、此胡降之徵也。」帝勅蘭臺給筆札、使作神雀頌、拜為郎、與班固並校祕書、應對左右。

『後漢書』楊終伝

楊終字子山、蜀郡成都人也。年十三、為郡小吏、太守奇其才、遣詣京師受業、習春秋。顯宗時、徵詣蘭臺、拜校書郎。

『後漢書』文苑伝・傳毅

建初中、肅宗博召文學之士、以毅為蘭臺令史、拜郎中、與班固、賈逵共典校書。毅追美孝明皇帝功德最盛、而廟頌未立、乃依清廟作顯宗頌十篇奏之、由是文雅顯於朝廷。

(22)

明帝馬皇后之父・馬援の兄・馬余の子。

(23) 『後漢書』儒林伝・孔偉

帝始亦無罪傳等意、及書奏、立詔勿問、拜偉蘭臺令史。元和二年春、帝東巡狩、還過魯、幸闕里、以太牢祠孔子及七十二弟子、作六代之樂、大會孔氏男子二十以上者六十三人、命儒者講論語。偉因自陳謝。帝曰、「今日之會、寧於卿宗有光榮乎。」對曰、「臣聞明王聖主、莫不尊師貴道。今陛下親屈萬乘、辱臨敝里、此乃崇禮先師、增輝聖德。至於光榮、非所敢承。」帝大笑曰、「非聖者子孫、焉有斯言乎。」遂拜偉郎中、賜襲成侯損及孔氏男女錢帛、詔偉從還京師、使校書東觀。

『後漢書』文苑伝・黃香

初除郎中、元和元年、肅宗詔香詣東觀、讀所未嘗見書。香後告休、及歸京師、時千乘王冠、帝會中山邸、乃詔香殿下、顧謂諸王曰、「此天下無雙、江夏黃童者也。」左右莫不改觀。

(24) 李尤は和帝時代に東觀に校書し、蘭臺令史を拝しており(『後漢書』文苑伝)、蘭臺の機能が完全に失われたわけではない。

(25) 後漢時代の東觀及び『東觀漢記』編纂に関しては、小林春樹「後漢時代の東觀について——『後漢書』研究序説」(『史観』一

一一、一九八四)、小林春樹「後漢時代における「合理的」曆法の成立とその歴史的背景について——「東觀人土」の活動を中心として」(『東洋研究』二二二、一九九六)、呉樹平前掲書。

(26) 『後漢書』宗室四王三侯列伝・北海靖王興

(臨邑侯) 復子駒駘及從兄平望侯毅、並有才學。永寧中、鄧太后召毅及駒駘入東觀、與謁者僕射劉珍著中興以下名臣列士傳。駒駘又自造賦、頌、書、論凡四篇。

『後漢書』馬融伝

(永初) 四年、拜爲校書郎中、詣東觀典校秘書。

(27) 『後漢書』宦者列伝・蔡倫

元初元年……(中略)……四年、帝以經傳之文多不正定、乃選通儒謁者劉珍及博士良史詣東觀、各離校家法、令倫監典其事。とあり、元初四年(一一七)に繫年されているが、おそらく永初四年のことであろう。

(28) 『後漢書』文苑伝・李尤

李尤字伯仁、廣漢雒人也。少以文章顯。和帝時、侍中賈逵薦尤有相如・楊雄之風、召詣東觀、受詔作賦、拜蘭臺令史。稍遷、安帝時爲諫議大夫、受詔與謁者僕射劉珍等俱撰漢記。後帝廢太子爲濟陰王、尤上書諫爭。順帝立、遷樂安相。年八十三卒。所著詩、賦、銘、誄、頌、七歎、哀典凡二十八篇。

『後漢書』文苑伝・王逸

王逸字叔師、南郡宜城人也。元初中、舉上計吏、爲校書郎。

『說文解字』許沖「上說文解字表」

慎前以詔書校書東觀、教小黃門孟生、李喜等、以文字未定、未奏上。

許慎の東觀校書については『後漢書』儒林伝の本伝には見えず年代が明らかでないが、『說文解字』段注、張震澤『許慎年譜』(遼寧大學出版社、一九八六)ともに、安帝永初四年の校書事業のこととしている。『後漢書』皇后紀にも、この折に中官近臣に東觀で説誦せしめたとあり、許慎が小黃門の孟生・李喜等に教授したという記述と一致する。

(29) 『後漢書』竇融伝・玄孫章

永初中、三輔遭羌寇、章避難東國、家於外黃。居貧、蓬戸蔬食、躬勤孝養、然講讀不輟、太僕鄧康聞其名、請欲與交、章不肯往、康以此益重焉。是時學者稱東觀爲老氏臧室、道家蓬萊山、康遂薦章入東觀爲校書郎。

と、竇章は東觀での校書に参画できた。一方、張衡も劉珍らの漢記の編纂事業に参画することを希ったが、彼はこの時の事業には参加できなかった。

〔後漢書〕張衡傳

永初中，謁者僕射劉珍、校書郎劉胸、駱等著作東觀、撰集漢記、因定漢家禮儀、上言請衡參論其事、會並卒、而衡常歎息、欲終成之。及爲侍中、上疏請得專事東觀、收檢遺文、畢力補綴。（注：衡表曰「臣仰幹史職、敢微官守、竊貪成訓、自忘頑愚、願得專於東觀、畢力於紀記、竭忠於補闕、俾有漢休烈、比久長於天地、並光明於日月、昭示萬嗣、永永不朽」也。）又條上司馬遷、班固所敘與典籍不合者十餘事。又以爲王莽本傳但應載篡事而已、至於編年月、紀災祥、宜爲元后本紀。又更始居位、人無異望、光武初爲其將、然後即真、宜以更始之號建於光武之初。書數上、竟不聽。及後之著述、多不詳典、時人追恨之。

(30)

〔後漢書〕鄧寇傳

（鄧）閭妻耿氏有節操、痛鄧氏誅廢、子忠早卒、乃養河南尹豹子嗣爲閭後。耿氏教之書學、遂以通博稱。永壽中、與伏無忌、延篤著書東觀、官至屯騎校尉。

〔後漢書〕崔寔傳

大司農羊傳、少府何約上書薦寔才美能高。宜在朝廷。召拜議郎、遷大將軍冀司馬、與邊韶、延篤等著作東觀。

〔後漢書〕延篤傳

桓帝以博士徵、拜議郎、與朱穆、邊韶共著作東觀。

(31)

〔後漢書〕盧植傳

時始立太學石經、以正五經文字、植乃上書曰、「臣少從通儒故南郡太守馬融受古學、頗知今之禮記特多回冗。臣前以周禮諸經、發起批謬、敢率愚淺、爲之解詁、而家乏、無力供繕寫上。願得將書生二人、共詣東觀、就官財糧、專心研精、合尚書章句、考禮記失得、庶裁定聖典、刊正碑文。古文科斗、近於爲實、而厭抑流俗、降在小學。中興以來、通儒達士班固、賈逵、鄭興父子、並敦悅之。今毛詩、左氏、周禮各有傳記、其興春秋共相表裏、宜置博士、爲立學官、以助後來、以廣聖意。」

……(中略)……歳餘、復徵拜議郎、與諫議大夫馬日磾、議郎蔡邕、楊彪、韓說等並在東觀、校中書五經記傳、補續漢記。

帝以非急務、轉爲侍中、遷尚書。

(32) 熹平石經に関しては、楊九詮「東漢熹平石經平議」(『文史哲』一九九〇年第一期)。

(33) 後漢末の黨錮の禁については、川勝義雄「漢末のレジスタンス運動」(『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二所収)、増淵龍夫「後漢黨錮事件の史評について」(『新版 中国古代の社会と国家』岩波書店、一九九七所収)、東晋次「後漢時代の政治と社会」(『名古屋大学出版会、一九九五)、渡邊義浩「黨錮」(『後漢国家の支配と儒教』雄山閣、一九九五)ほか。

(34) 上谷浩一「後漢政治史における鴻都門学——靈帝期改革の再評価のために」(『東洋史研究』六三—二、二〇〇四)は、靈帝による鴻都門学の設立は、二度にわたる黨禁によつて「儒家官僚」や太学生を批判勢力として一掃せんとしたが、その結果文書行政を担当・処理する能力を持つ官僚を維持することが困難になり、太学に代わる新たな官吏登用機関を設置する必要にかられた苦心の策である、とする(二五〇頁)。このほか、王永平「漢靈帝之置『鴻都門学』及其原因考論」(『揚州大学学报』社会科学版、一九九九年第五期)は、鴻都門学の設立は、儒学世族が興起して門閥制度が形成されはじめる時に、それに脅威を感じた皇権との闘争と関わりがあると述べる。

(35) 康小花「鴻都門学考」(『芸術考古』二〇〇四年第四期)など、現代中国における鴻都門学は中国史上初の芸術学校として認識されている。

(36) 『後漢書』李固伝

固对曰、「……(中略)……陛下宜閑石室、陳圖書、招會羣儒、引問失得、指撝變象、以求天意。其言有中理、即時施行、顯拔其人、以表能者。則聖聽日有所聞、忠臣盡其所知。又宜罷退宦官、去其權重、裁置常侍二人、方直有德者、省事左右。

……」。

『後漢書』李固伝

時連有灾異、瓊上疏順帝曰、「聞者以來、卦位錯謬、寒燠相干、蒙氣數興、日闇月散。原之天意、殆不虛然。陛下宜開石室、案河洛、外命史官、悉條上永建以前至漢初灾異、與永建以後訖于今日、孰為多少。……」。

ここに言う「石室」とは、『後漢書』王允伝に、「初平元年、代楊彪為司徒、守尚書令如故。及董卓遷都關中、允悉收斂蘭臺、石室圖書秘緯要者以從。」とある秘書が所蔵された場所を指している。

(37) 徐興無前掲「漢代的『秘書』」は、宮中に禁蔵された書籍が、『秘』『中』『内』を冠して呼ばれ、その書は神聖性と秘密性を持つようになる。そうした觀念の影響の下に、漢人は天文數術方技や讖緯の書を神聖視して、『秘』『中』『内』の名を冠するようになった、とする。(二二五頁)。